

沙漠と激む小川を喜ばさんとするさまを。

かく人の賞するものもなき花に對してエマソンは語る——

ロドリゴよ！もし賢人汝に問うて

何故にかゝる美の空しく天と地に成たる、やといへば、

彼らに答へよ、眼は見るために造られしものならば、

美もまた己れの存在の理由をもつと。……

これと同じく「ハムブル・ビー」(花蜂)の詩は、やはり五月の陽は照り南風は香る中に、花に戯れ蜜を味ふ快樂主義者のこの昆虫に親しみの言葉を寄せ、しかも冬來り北西の風に海も地も氷る頃となれば、深き眠りに入りて、人間の缺乏と惱みを笑ふその哲人的な賢さを羨望する。そしてその表現に、蜂の羽音をさながらに現はすやうな音律の流れてゐることも目ざましい。日記によれば(一八三七年五月九日)「昨日私は森の中ですばらしい一匹の花蜂のあとを、すばらしい韻律と空想でついて歩いた」とある。即ちエマソン自身が花粉にまみれ蜜に満たされて森から歸つてきたのである。このやうにして、いつも彼の自然の詩は成るのであつた。

自然の詩につぐものとしては、彼の個人の感想や身邊の出來事に觸れたものがある。前にあ

げた「ターミナス」や子供の死を悲しむ「哀歌」(スレノディー)、また兄弟達の死をいたんだ「哀歌」(ザ・ダージ)はそれであり、殊にこれら死の歌は、エマソンの質實な家庭の空氣と彼の純真な感情を、感銘深く現はしてゐる。なほ、前出の「コンコード・ヒム」をはじめ、獨立戦争や民主主義精神を歌つた愛國の詩にもすぐれたものがあるが、これらもこの部類に入るであらう。

最後に、哲學的な詩の部類がくる。これは彼の詩の最も特色深いものであり、その分量も多い。しかも、彼の詩が難解或は生硬なりとして敬遠されるのは、多くこれらの詩によるのである。しかし、その中のよき詩にあつては、理解力ある少數の讀者の魂を動かすこと、比類少いものがある。そこには彼の神祕な直覺を通して、永遠の眞理と自然の榮光が、清らかな輝きをもつてさし入つてゐる。美と氣だかさがそこにはある。「美の頌」「愛にすべてを與へよ」の如きはその例である。そして自然の中のすべての生命にひたり、あらゆる體驗をくゞつて遂に宇宙と一體にならうとする要求は、彼の散文のどこにも見られぬ強烈な熱情を以て比喩詩「バツカス」の中に歌はれてゐる。それに似た「ユリエル」に於ては、その比喩は、善と惡、幸と不幸の同一性に向けられ、

自然には隔ての線なし、

個體と宇宙は渾然たり、

徒らに放たれつゝ、あらゆる光は歸りくる、

禍ひも祝福し、氷も火と燃えん。

それはエッセイの「報償」の説に近くして、それよりも更に深く根柢の眞理を指せるものである。東洋的影響の全く顯著な「ブラーマ」の言葉に、吾々の聞くものもまたそれである。

近きものも吾には遠し、また吾に忘らる、

蔭も光も同じもの。

消え去りし神々も吾には現はれ、

恥も譽も吾には一。

更に「ブラーマ」と並んで、ベルシャの十三世紀の詩人「サーディ」を表題とする詩にあつては、理想の詩人を描いて、詩の歌ふべき眞理を、自己の體驗と交へつゝ、力強く述べてゐる。これと同様に、自己の直接的哲學的思想を、生き生きした象徴を借りて歌つた詩に、「日々」「日の糧」「スフィンクス」「問題」「各々とすべて」等がある。――

すべては各々によつて求めらる、

何ものも獨りにて美しく又善きものはなし

とは、この最後の詩の歌ふ哲理である。なほ彼が哲理を、直接的な自然の形象を以て歌つた詩としては、彼の詩の中でも殊に有名な「二つの川」の如きがある。そこでは現實のコンコード川の流れを敘しながら、その河中に流るゝ今一つの川――萬物をひたす大靈の流れのあることを歌つてゐる。更にエマソンの詩はその哲學と共に一層大きな規模にひろげられる。即ちこのやうな直接的個人的經驗や感想から、自然を一層廣い視野に於て見、自然を離れて墮落せる人類に、自然へ（即ち神へ）歸るべきことを要請する。

汝の頬はあまりに白し、汝の體はあまりに細し、

汝の歩みはあまりに遅く、汝の風習は弱し、

王者のやからたるには。――そは汝が

荒野よりの追放者たることを示す――

健康と健康と諧和する山地、

賢き魂の病を驅逐する所。

長詩「森の調べ」の中には、このやうに現代の人間——自然への背徳者としての人間のみじめな姿を描いてゐる。自然の力に浴する人間の姿はどのやうなものになるか——

清らかに彼は、外も、内も、

古き執拗の罪より逃れむ。

すべてに公平に、すべてを抱擁する運命を、

彼は愛すれど諂らふことなけむ、

あらゆる禍ひは彼の不屈に

鋭き視力の中に消えつつ……

大空の星座はことごとく

その力を彼の眼を通じて放つ。

彼に自然は擁護のため

恐るべき無邪氣さを與ふ。

樹心をのぼる樹液も、貝がらも、海も、

あらゆる天球、あらゆる石も、彼の助力者たり。

彼は老ゆることなからん……

人間はかくて自然そのものであり、その生命は自然と一體にして普遍にまた永久のものとなる。こゝに至つてエマソンの詩は、殆んど神託の響きを帯びてくるのである。エマソンの詩は缺點多く、彼は決して大詩人と認められないにせよ、彼の精神は詩に於て始めてその純粹な偉大さを示したといへる。彼はかつてカーライルへの手紙の中で「私は詩人には屬しません、ただ文學の下級な部門、リポーターのたぐひです」と謙遜な言葉を書いたが、彼の氣持は、リディアに結婚の少し前送つた手紙に、最もよく現はれてゐるやうである。「僕は詩人として生れました——低い階級には違ひありませんが、それでも詩人なんです。それが僕の性質でありました天職なんです。僕の歌は、たしかに悪聲で、大部分は散文です。それでもなほ僕は、靈と物質の中にある調和、殊にその兩者の間にある調和を、認識し愛する者といふ意味で詩人なんです。」

この謙遜も自信も、共にエマソンの本心であらう。そしてこの自信が誇大なものでないことは、彼ののこした詩が充分に證明してゐるところである。

なほ彼は、一八七四年の十二月、「バーナサス」と題する英詩と米詩の選集を公けにした。そ

れは彼が讀書の間ノート・ブックに記し、屢々講演の引用に用いたもので、その編纂は大部分一八五五年から六五年の間になされた。それらの詩のうち三分の一までが十七世紀の英詩であることは、彼の好尚を語るもので、數としてはシェイクスピアが一番多く八十八回に達し、ワーズワスが四十三回でそれに次いでゐる。知性的な深みをもつた詩が多く、通俗で評判な詩は殆んど省略されてゐる。エマソンがそれに附けた序文には、つぎのやうな意味ふかい言葉がある。——「偉大な詩人は、彼らがつくり出す氣分によつて判定される。あらゆる人間のうち、彼らにこそ最も嚴格な批評が加へらるべきである。」

第十章

あらゆる人間は「愛する者」を愛する

人間

息子エドワードが書きとめてゐる所によると、エマソンは丈高く、靴をはいて六フィートあつた。晩年に至るまで姿勢はまつすぐで、體格は太い方でも細い方でもなかつた。たゞ肩幅が狭く前屈みの癖あり、頸は長かつたが、頭の位置はいつもちやんとして、その動作にも威嚴があつた。眼は異常に青かつた。髪は暗褐色で、顔色は澄んで、いつもよい血色だつた。目鼻立は凹凸が際立つてゐたがよく洗練され、彫刻のいふ非常に深くモデルした顔だつた。——外の出所によると、彼の頭といふのは、哲學者的でなく、帽子の寸法は六個八分の七で、普通人でも平均七か七個八分の一なのだから、非常に小さかつたわけだ。しかし恰好は均衡がとれて、前頭部と後頭部の幅が殆んど同じだつた。顔は痩せてゐて、鼻は猛禽類のくちばしの如く広い影を投げてゐた。口はや、廣く、恰好よく結ばれ、下唇は少し突き出、頤は鋭く固く、顔全體を引きしめてゐた。その茶色の髪は非常に細かくて、五十になる頃まで房々してゐた。眼は

實に強く輝いた青色だった。あんな青い眼は、長年氣をつけてゐても、船長（それもたつた三人の船長）が、持つてゐただけだと、家人は話してゐる。顔の表情は静かで澄み切つて優しく、洗練されてゐると共に、いつも活潑な探求的な知性の光が全體に放射してゐる。舉動は實に氣高く優雅だった。ホームズはローエルからもらつた手紙の言葉を記録してゐる。——「彼には私の知つてゐるどんな人間でももたない程の威嚴があつた。彼は、吾々の大部分が唯時々噴出してそこまで飛びあがるだけの、廣い神聖な空氣の中にいつも住つてゐた。」

息子のエドワードなどの觀察とちがひ、ジュリアン・ホーソーンが「回想録」に記してゐることは、誠實の點で却つて信頼すべきかも知れない、彼は言つてゐる、——大抵の人はエマソンは美を、しかも異常な程度に持つてゐたといふ。彼が室に入つてくると、魔術のやうな日光があたりにさした。その輝やかな光の中に、誰も彼の醜さを見ることができなかつた。不恰好な歪んだ體つき、不様な手と足、小さな頭、狭い額、非古典的な鼻、細くて深く溝の入つた額。頭は少し前に傾け、足どりはひよろ／＼してゐる。これがどうして美と一致しようか？ とジュリアンはいふ。そしてこの謎を解くものは、エマソンの豊的な思想であり、それが相手の思想をも（容觀の印象など忘れて）豐の世界まで引きあげしまふのだらうといふ。そして一つ一つの魔術としては、彼の微笑がある。「それは善と

眞と偽の世界の保證だった。彼はいつも眼を閉ぢながら微笑む、すると、それは縁がかつた灰色で大きくはないのだが、疑惑と悪意を追ひ散らす光を放射するやうに見えた。」そして彼はまた聲の魔力について言ふ。「彼の姿が見えないでも、彼の聲は彼の姿を描きだした。會話の時には、それは丁寧だが確信をもつた魅力ある聲の和音だった。公衆に語る時には、命令するやうに或は説得するやうに一つの氣持から他の氣持へと移りながら、銀のラッパのやうな響きをつたへた。そして彼は辯論の全力を頂點の一語に集中することができた。」

彼が何となく虚弱な體つきであり、殊に顔も體も瘠せてゐたことは特色であつたらしい。あなたは尋ねる度に瘠せて居られますね、などといはれた。

しかし、彼は決して不健康ではなかつた。青年の時まで體質的に病弱で、心の底には病者の氣質がのこつてゐた。癡疾になることをいつも恐れ、病氣の話や體具合の愚痴を、家人が言ふことさへ喜ばなかつた。しかし、詩の中や手紙では、この問題に隠さず觸れた。カーライルには、あなたは虚弱とか因循とかについては何も知らないといつて羨やみ、自分はその虚弱因循の犠牲者だといつてゐる。詩では晩年の「ターミナス」の中でまで、弱い體質の遺傳を歌いてゐる。しかし、こんなことは、實際に於て彼の思ひ過したつたと考へる外ない。體に無理をせぬ

注意がよかつたか、戸外に親しむ習慣の結果か、中年以後は極めて健康で、殆んど病氣をしなかつた。西部旅行の難儀さへ、かへつてその活力を強める状態になつた。散歩することが何より好きだつたが、歩く足も早かつた。旅行でも滅多に馬車を利用しなかつた。停車場へ行くに、重いカバンを提げて、同伴者が参る位の速度で歩いた、それが別に努力もせず、息ぎれもせぬ有様だつた。彼はこんなうまいことを言つた、——「君が靴をはきつづけた時には、靴底の革の力が、君の體の筋肉にはいつてゐる。」馬に乗るのは下手だつたが、スケート靴の古いのが一疋、いつも書齋の押入に吊つてあつた。冬になると淋しいウォールデンの池に子供たちと出かけ、五十になつても彼らに負けず、真直ぐな姿勢でよく滑つた。夏には、但しうんと暑い日だけ、そのウォールデンへ行つて、中々うまく泳いだ。彼にはいつも健康を求める氣分があつた。そしてそれが彼の、明るく物を見ようとする個性と融け合つて、快い生き生きしたものをその言葉の中にも現はしてゐる。日記の中の次ぎのやうな言葉の味は深い、——「健康、南風、書物、老樹、一隻のボート、一人の友」(一八四七年二月)。

彼の日常生活は極めて單純だつた。朝はコーヒーを、夕べは茶をのんだ。動物食は一日一回、酒は客のある時だけ、それも自分は大抵一杯しか飲まなかつた。たゞ朝食のバイだけは缺

かさなかつた。食事の實質には全く無頓着で、食卓に置かれるものを、健康な食慾で食べた。料理に注意したり、褒めたりすることもしなかつた。そんな話になると、すぐ冗談をいつたりして話題をはづした。烟草は大學時代におぼえたが、五十歳頃になつて極く少しく、それも相手のある時だけのんだ。一八六六年の日記に書いた、「頭腦を散らせるタバコ。しかし、談話をしない人間はのむべきである。」

十時には寢て、六時に起きた。晩年の十年だけは、七時に起きるやうになつた。散歩は毎日午後、茶の時刻まで四時間、天氣のよい時や、歩いた方があとで仕事のできさうな時は、時間を延長した。仕事や客のために夜をふかすこともあつたが、それを幾晩もつゞけても平氣だつた。朝食のあと、夕方まで何も食べぬやうなこともあつた。着物は例の黒い服と灰色の服だけで、いつもさつぱりした目立たない風をしてゐた。自分の服装にも他人の服装にも少しも興味をもたなかつた。

彼の聲が講演でも會話でも特殊の魅力をもつてゐたことは有名で、氣持よく、弾力があり變化に富んでゐた。そして彼のやうな狭い胸から出るものとは思へない力をもつてゐた。高くもなく、鋭くもなかつたが、不思議によく透つた。オールコットは言つた、「エマソン君の體の機

關は、自由に解放されてゐるものもあり、運命に呪はれてゐるものもある。聲は完全に解放されてゐる。彼の詩でもエッセイでも、彼がその聲で読んで聞かすまでは、本當に公表されたことにならない。」

かういふ聲をもつてゐる彼が、音樂の耳をもたず、平凡な音譜でも聞きわけられなかつた音痴であつたのはをかしい。彼の詩が音樂的に不充分であり、耳障りな音を含んでゐたことは、このこととも關係する。しかし、彼はよい音樂を聞き、殊に女性の歌を聴くことは、好きだつた。彼は大聲で笑ふことを嫌つた。それは不しつけなことだと思つた。殊に下らぬ冗談で笑ふことはいやがつた。自分がつい笑はされる時には、顔の筋肉を制御しようと思つた。マーガレット・フラーがいつも笑はずといつて、彼は不平を言つた。

こんな彼は、話の時でも、急に適當な言葉を見つけることができないで、センテンスの途中でとまつてしまふやうなことが度々あつた。すべて彼は文章でも講演でも即興的なことはできず、幾度も練り直さねばいけなかつた。手紙でさへ重要なものは下書をせずには書かなかつた。一八六四年、サターデー・クラブで、シェイクスピアの記念の宴で、何か言ふやうにとせがまれ、立ちあがりはしたが、(あんなによく知つてゐるはずのシェイクスピアについてさへ)

一語も出てこず、一二分靜かにあたりを見廻し、そのまゝ、靜かに腰をおろしてしまつた。――すべて、かういふ點には、彼が天性スローであるといふだけでなく、彼の孤獨性、生き／＼した人間の接觸の中で自由に反應するといふ性質の缺乏が現はれてゐるとも考へられる。

音樂の耳をもたなかつた彼は、色彩の眼をあまり持たなかつたらしい。色よりも形に關心した。従つて繪畫殊に風景畫には興味なく、ミケランジェロの作品やギリシヤの彫刻を好んだ。しかし、總じて彼の藝術美に對する感受力は狭小で、古典的な洗練した美はわからず、文學的な味よりも象徴的な意味を尊重した。詩で好んだものは北歐やベルシヤの古詩などで、古代のギリシヤ詩人やフュンス、イタリヤの藝術的な詩の美はわからなかつた。同時に彼は、近代小説の味を知ることでもできなかつた。ディケンズやブロンティ姉妹でも、數ページで閉ぢてしまつた。そこに書いてある事實や想像が馬鹿げて見えた。それは彼の生ひ立ちや體驗が、そんなものへの同感を與へなかつたからであるが、一層深い原因は彼の冷たい反人間的な本性にある。ともかく藝術に對する彼の感受力鑑賞力は甚しく制限されてゐた。自然を彼は愛するが、自然の繪畫的な美といふものを、それほど求めず、むしろ自然の與へる粗野な力、いのちといふものを喜んだ。それは小鳥や牛や鹿たちと同じ態度だつた、雜草が生ひ茂つて花粉がむせる

やうにふりか、つてくる所や、夏の暑い午後、蛇が群がり飛び、シダの葉まで息づくやうな所が、彼には畫家の喜ぶ林間の打ち開いた眺め同様に好もしかつた。たゞ、かういふ傾向には、それとしての貴重な健康性があることは勿論で、彼は草花でも鳥獸でも、自然のその在るがままのところを鑑賞するの喜び、園藝の花などには興味をもたなかつた。

この自然に對する彼の尊重、自然に身と魂をまかして、その生命と示唆を思ふまゝ受け入れようとする態度は、彼の思索や學問の態度にも影響した。彼は理知の思考を重んぜず、直觀を絶対に信用した。また書齋に籠る時間は多いが、書物の組織的な「勉強家」ではなかつた。書物は學者的な讀書はやめねばならぬといふのが彼の意見だつた。日記に彼は書いた、「書物は學者の怠惰な時間のためのものだ」(一八三七年)。ラテン語やギリシヤ語は、當時のハーヴァードの不完全な教育で教はるだけの少しの知識をもつてゐたが、滅多に原書を読むやうなことはしなかつた。ドイツ語フランス語も同様だつた。ゲーテだけは全著作を原語で讀んだが、その他の作家や哲學者は、どの國のものでも英譯で讀んだ。「翻譯があるのに原書を讀まうとするのは、こゝからポストンへ行くにチャールズ河を泳いで渡らうとするやうなものだ」と言つた。彼の讀書は廣かつたが深くなく、散漫で綜合性がなかつた。書物の選擇でもまた批評で

愛する者

も、全く自己本位(或は直覺本位)だつた。元來彼は知識を重んじなかつた。それは生きる力の一つの源泉(低級な源泉)に過ぎなかつた。「表現こそは吾々の欲するものだ。知識ではない、噴出だ。」と彼は言つた。それは彼の讀書をも、また作文をも特色づける根本の精神であり方法だつた。既にハーヴァードの神學生時代から、彼は森や牧場に行つて、そこで詩文を書く習慣をもつた。ウォールデンの森は、どんな意味でも彼の書齋だつた。

家庭に於ける彼は、よい主人であつた。召使たちを大切にし、無理な勞働をさせたり、感情や自尊心を傷けるやうなことの無いやうに、細心な注意をした。「王の召使は王自身だ」といふベルシヤの格言をよく引いた。自分も出来るだけ召使にたよらぬやうにし、火も自分でおこせば、薪も自分で腕一杯に抱へて運びこんだ。停車場へ旅立つにも、カバンは自分で提げ、近隣の町へ講演に行く時は、自分で馬車を驅つた。子供たちにはいつも優しい愛情をもつた。赤ン

坊をとり扱ふと、動物や道具を使ふにあれば不器用な彼に全く不思議な位の熟練を示した。小さな子供はいつでも書齋に出入を許され、そこに飾つた彫像や繪本を見せてもらひ、手におへなくなると、そつと巧みに部屋から出された。食卓で泣く子があると、表へ行つて門がしまつてゐるかどうか、或は雲が出てゐるやうだかどうか、見ておいでといつて外へ出された。子供は何のこともよくわからず、野原の景色を眺めたり、空のお日様を見あげたりして、それでも氣持がなごんで、歸つてきて、まじめに報告し、自分の高い椅子にまたよち登るのだつた。たゞエマソンは、子供たちが馬鹿げた冗談をいつてふさげ合つたり、悪意のある噂話の受賣をしたりすることは許さなかつた。戀愛の話は（學校の他愛のないロマンスでも）輕々しく口に出せなかつた。死の問題もさうだつた。戸外の遊戯は奨励したが、室内遊戯殊にカードはいやがつた。日曜は家庭でも神聖に（舊式の嚴格さではないが）守らるべきものとした。子供たちには教會へ行かせた。自分は村へ來て暫くの間は教會へ出たが、中頃には、ウォールデンの森が彼の教會のやうなものになつた。どこに教會があるかは、各人の問題だといふのが彼の意見だつた。——淋しい森でも、室内でも、眞面目な友人たちとの談話でも、牧師の説教でも、それぞれよいわけだつた。（晩年ハーヴァードの監事の頃には教會出席を重んずるやうになつた。）

日曜日の朝、彼はよく子供たちを食堂に集めて、彼らには少しむつかし過ぎるやうな、歴史や文學の本（パークの演説やシドニー・スミス、チャールズ・ラムのものなど）を讀んで聞かせた。午後の四時になると、母の部屋でバイブルの讀誦をすませた子供たちを引きつれて、ウォールデンや奥の方の山野へ遠足した。道すがら自分の好きな草花（それは大抵目立たぬ質素な花だつたが）を見せたり、新古の詩やバラドを吟じて聞かせたりした。

彼は子供たちが、ラテン語とギリシヤ語を勉強することを大切に思ひ、一緒にヴァージルを讀んだりした。雑書の氾濫で、標準的な本を讀むことがなくなるのを恐れた。息子のエドワードには、ブルタークを毎日二ページ、日曜と休暇には十ページ讀めといつた。近代語にはあまり關心せず、フランス語やドイツ語は、覺えたければ自分で樂にやれるといつた。子供たちが數學を嫌つてゐるのには大いに同感して、學校の課程でさへなければ、あんな學科はよしてもい、のだといつた。子供たちが成長しはじめた後は、重要なことは自分で決定する責任を負はせ、命令したり禁止したりすることはしなかつた。あの叔母メリから與へられた格言「汝のすることを恐るゝものをなせ」といふのが、また今度子供たちに與へられた標語だつた。すべて子供や若い者たちに對し、愛情と共にその人間性に充分な敬意をもち、彼らの將來の發達に期待を

かけてゐるのは、彼の特徴だつた。青年のもつ美しさ、まじめさ、その希望に満ちた態度が、彼にはいつも魅力だつた。子供と青年は彼のかはらない愛見だつた。

彼はまた、コンコード村の平凡な働く農夫たちの間でも自然な存在だつた。氣どることもない善良な一村民だつた。村の集會にも出、自分の出来る有用な役割を引きうけ、畑をすると下手だつたが、皆に尊敬された。村のライシーアムの委員で、自分も村人相手に講演した。「私、あの方のいはれる言葉、一つもわからないんです。でも、あそこへ行つて、あの方が立ちあがり、誰でも自分と同じ良い人間だと思つていらつしやる様子を見ることが、好きなんです。」ある婦人はこんなことを言つた。

「彼を知るものは、みんな彼の友となつた。誰でも彼の敵となることはできなかつた。その舉動の單純な優しさは、一つ／＼の表情と語調に現はれる眞面目さと共に、ほんの一時間でも彼と會つた人に、無關心な氣持でゐることを許さなかつた。小さな子供でさへ、彼を知り彼を愛した、腕に抱かれてゐる赤ん坊も彼の天使のやうな微笑に答へた。」と、ホームズは記してゐる。

しかし、このホームズが、そのあと筆を轉じて、彼の兄弟のエドワードとチャールズ以外、誰

が彼に眞實接近し得たものがあるだらうかと、疑問を起してゐるのは意味ふかい。「ローエル君のいつもいふあの『尊嚴』といふものが、王のぐるりを取りまく神性のやうに、エマソンのぐるりに垣根を結つてゐるやうに見えた。彼の肩に遠慮なく手を置いて、ウォルドーと呼ぶことのできたものは誰だつたらうか？」そしてホームズは、少くともサタデー・クラブの會員の中で、そんな人間は一人もなかつたといふ。「彼の友情の觀念は、愛の觀念と同じく、吾々の地上の状態にはあまり高級に過ぎたらしい。」彼の肉體を生氣づけてゐる精神は、より高い光の輝く世界に昇らうとしながら、その輝く道の中で行方を失つてしまふ、それが彼の特徴なのだ。とホームズはいふ。エマソンは誰人にも優しいが、誰人とも暖くは結ばなかつた。それは、その輝く道に自己を失つてしまふ彼の精神の特質によることはたしかだ。彼は現實に目の前に一人の人間を見ても、頭の中ではその人間は抽象的な一個の「人間性」として映寫されてゐる。彼はその友人に高貴な、神に近い部分のみを求める。このやうな愛はその友人を一層よく知るに従つて當然幻滅し減退せねばならぬ。彼はおのづから獨りの世界にこもる。これは彼の知性の洗練からくる特殊の結果であるが、その上に彼の個性として、生來の非社交性孤獨性は、如何ともしがたいものであつた。一八三九年の日記に彼は書いてゐる、——「ある人々は公けの

靈として生れる。あらゆるドアを街路に開けて住つてゐる。彼らのすぐそばに、それと対照して孤獨な人間が住んでゐる。ドアをみんな閉め、黙つて、考へこんで、群集を避けて、手をにぎることさへ恐れてゐる……」そして又こんなことさへ書いてゐる。「……自分自身の家の中で見る人間の大部分を、私は淵の向ふ側に見てゐる。私が彼らの方へ行くこともできねば、彼らの方から來ることもできぬ。そんな人間と話す時の私の言葉の冷たさときこちなさは何にも比べられぬ。」——それは殆んど孤獨地獄の悲痛な言葉ではないか。

エマソンのこの友情に於ける缺陷は、彼の藝術感受力の缺陷と同じく、體質的運命的なものだつたとも言へる。そこには人間としての不完全な、偏つた、冷たさといふものが支配してゐる。それは彼の生涯の経験が限られ、あまりに「清かつた」せいでもある。ヘンリー・ジェイムズ(父)は、ある時エマソンに「告白」をさせようとした、しかし無駄だつた。エマソンは告白すべきものは何も持たない、質問の意味さへわからぬのである。ジェイムズはたうとう結論する外なかつた。コンコードの賢人は道德的経験といふものをもつたことがない、處女やまだ生れぬ赤ん坊と同様だ。違つてゐるのは、彼が知識をもつてゐることだ、しかしそれも理論だけだ。それだから、書物や講演で感激して、煩悶を訴へてくるやうな人々は、意外の失望

をする外なかつた。自分として直接罪の誘惑を経験したことの無いエマソンが與へる解答は、個人でなく抽象的な人間性一般への返事ではしなかつた。彼らはパンの代りに石をもらつて歸る外なかつた。

しかし、すべてそのような、免れ難い缺陷にも拘らず、エマソンの「善意」については何人も疑ふことができなかった。そしてエマソンは、何よりも眞實の友を求めたものであり、そして何人にも眞摯な愛を注がうとするものであつた。そして彼の冷たい位の落ちつき、傲慢とも見える自制の態度は、弱き者苦しめられた者には、信頼すべき力の感じを與へた。そしてその微笑は、どのやうな頑な心をも溶かした。殊に彼が強い關心をもち、また自然な融合をすることができたのは青年たちで、彼の身邊で、ソーローやチャニングのやうな平下の友人が最も彼に接近したやうに、國內國外から手紙をよせ、又訪ねてくるものにも青年が多かつた。遠くからくる、さういふ訴へや感謝の手紙を、彼は注意して讀み、手紙を書くのに手軽く書けぬ性でありながら、屢々丁寧な返書を書き、長く關心を續ける場合も多かつた。當時の彼の影響につき、マシー・アーノルドは、エマソンの死の翌年アメリカでなした講演の中で言つてゐる、——「その昔のオクスフォード時代のこと、一つの聲が大西洋のこちらの岸から吾々の所まで聞え

てきた、澄んだ純粹な聲だつた。それは私の耳に、ニューマンやカーライルやゲーテの聲にも劣らぬ、新鮮で感動的な忘れることの出来ぬ響きをつたへた。」
エマソン自身かう言つてゐる、「私の教會員は道をたづねる青年たちだ。」——彼のその希望は達せられたわけである。

光 明

エマソンが與へたかういふ影響の中心をなすものは、一種の宗教的な光明だつた。それは思想とか哲理とかいふものではなかつた。彼の説く所の眞理を要約するならば、一、神と人にとける存在の一致、二、眼に見ゆる物質界は精神によつて造られ、従つて精神界の象徴であること、三、精神界物質界を通じて同一の道德的法則が支配してゐること。これが彼にとつて生の基礎であり宗教の實質であり又宇宙の意味であつた。しかし、これらの眞理を把握するに、彼は理智を用ひず、直観にたよつた。神祕的な光明の經驗にたよつた。それは殆んど未開人の

宗教心にかはらぬものであつた。「自然論」の初めの部分に、自然に接して彼の受ける天啓的な靈感の體驗を述べた所がある。——「赤裸かの原つばを、雪のとけた泥の中を、夕ぐれ、曇つた空の下で、特別な好運が起らうなどと思ひもせず歩いてゐる時、突然私は完全な歡喜に襲はれた。その喜びは殆んど恐怖に近かつた。」さういふ時、彼は「一個の透明な眼球となる。自分は無だ。そして自分はすべてを見る。宇宙の生命の流が自分を貫き流れる。自分は神の一部となる。」——これは廓然大悟すといふやうな、古來の宗教的體驗者を襲つた歡喜にも似たものである。エマソンには、かういふ神祕的な個性があつた。それが彼の教説を、甚だ非近代的な時代遅れのものとすると共に、そこに含まれてゐる宗教としての不變で貴重な性格が、近代思想の中で神と教會を見失はうとしてゐる人々に光明と力を與へた。アメリカで言へば、ユニテリアニズムによる宗教の理智化散文化のあとをうけて、エマソンはそれを一層自由につきつめることによつて、却つて神の神祕に近づいていつた。人々はエマソンによつて、人間の靈の神聖で無限な本質を證明され、個人の神祕的な直観の價値を自覺させられた。

エマソンが彼らに與へた力は、さういふ神祕な普遍的な面と共に、個人の現實に於ける存在を確持する信念であつた。彼の個人尊重は、個人を社會集團の中から切りはなち、また人類の進

化の過程から切りはなち、あまりに個人に視力を集中する點で、やはり非近代的であり、救ひ難い缺點をもつと言はなければならぬ。しかし、同時に、その自恃の主張の中には、強い道義的な實踐的な力が含まれてゐる。彼は諦念や犠牲を説かない。積極的な行動、自己の擴充を説く。人生に於けるエネルギーを彼は最も尊重する。物質的成功によつて道徳的な力が示されるとする。そしてかういふ努力の機會を、あらゆる個人に與ふべしと主張する點に於て、彼は極めて民主的であり、當時の文學者の誰にもまさつてアメリカの土地と民衆に近接してゐた。彼はアメリカ人の實踐的理想を鮮明に表現し、アメリカの將來の發展に樂天的な希望をかけてゐた。それらはアメリカ人に訴へないではやまない特質である。しかし彼の眞正な感化は、そのやうな政治的な世俗的な狭い範圍でなく、あらゆる個人を、生命的に自覺させ、解放し、力づけることであつた。あらゆる國に於て、煩悶や不平をもつ者、何らかの革新を思ふ者は、彼の書物から希望を以て起ちあがり、その孤獨な仕事、必死な仕事をつき進めることができた。——かうしてエマソンが世界に與へた影響は、理智の導きでなく、一面に於て神秘的宗教的な靈の自覺、他面に於て強靱な道徳的な力の自覺であつた。そしてこの宗教と實踐の二面を通じて、一つの靈感的な力が動いてゐた。そしてそれはまた革新的改造的な力であつた。エマソン

の人物は結局何よりも宗教的であつた。彼は普通の意味でクリスティアンではなかつた。それは當時の教界の情勢を反映するやむを得ない結果で、彼の革新的な態度によつて、むしろ非近代的な、しかし永遠な眞理が復活され、そこから新しい宗教精神の確立が呼び求められた。しかもそれは、アメリカのみならず、あらゆる國土に於て、若く勇氣ある魂に呼びかける聲であつた。その聲をオクスフォードに於て聞いたアーノルドの、後年の言葉を借りるならば、エマソンは、「偉大な詩人でも、偉大な文學者でも、偉大な哲學者でもなかつた。……彼は靈の中に生きんと欲する人々の友人であり助力者であつた。」エマソンの吾らに對する印象は、何よりも一人の人物、——完全な紳士であり、純化された精神である。このやうな人物、精神は、世界の文學のどこにも容易に發見されないものであらう。

終

章

今は老ゆべき時
帆をたむべき時

第三次ヨーロッパ旅行

一八七一年の春、娘イーディスの夫の父にあたるフォーブズは、エマソンを西部の旅行に招待した。彼は西部の鐵道建設に長い間關係し、勢力と富をもつてゐた。ハーヴェードの講演後のエマソンの疲勞の様子を心配した彼は、この漫遊を保養のため計畫した。エマソンは喜んで好意をうけた。同行者は、娘夫妻と數名の心置きない友人だつた。旅行中エマソンは、極めて上きげんで、「疲れる様子もなくいつも快活な」のに、若い仲間を驚かした。ヨセミテの谷に荷車と馬背で旅し、サン・フランシスコでは阿片窟をのぞき、ソート・レーク・シティーではモルモン教のブリガム・ヤング教祖に會ひ（教祖はエマソンが誰かといふことに注意を拂はなかつた）、ナイヤガラ瀑布を通つて、元氣に家へ歸つてきた。そしてその秋には再び西部へ講演の旅に出かけた。しかし、一度始つた老衰の徴候は、おりちりと進んでいつた。彼は精神ではいつまでも若かつた。感情も衰へず、信仰も揺がなかつた。肉體も急には弱らず、髪もすつ

と晩年まで房々と茶色の色を保ち、若い時になやんだ眼は、老年になつて却つて強くなり、六十四歳の時、ファイ・ビータ・カッパの講演で、原稿が讀めなくて狼狽するまで、眼鏡をかけることを考へなかつた。けれども老衰は、記憶力の喪失となつて明らかに現はれてきた。話の途中、適當な言葉を思ひあたらず、また人や物の名を思ひだせぬやうになつた。フォークとか傘とかをいふのに、手眞似でしたり、たとへで説明したりしなければならなかつた。ある時、傘がほしい時に言つた、「その名前をいふことができないんだが、歴史を話すことはできるよ。そら、家へくる人間がよくもつて行くもんだよ。」

こんなことから自然人に接することを避けるやうになり、一層書齋に引きこもるやうになつた。

一八七二年の七月二十四日の朝五時半頃、眼をさますと寢室が烟に包まれ、頭の上の床から焰がもれてゐた。彼は表門へ走つていつて救ひを呼んだ。四方からかけつけた人々によつて書物や原稿や家具は大部分たすかり、火元の屋根裏部屋の書類が焼けただけだつた。八時半には鎮火し、壁はのこつたが、二階は破壊された。夜中雨が降つてゐたが、薄着でそこを歩き廻つたために、エマソンは風邪をひき熱を出した。それは間もなくなほつたが、その突發事の衝撃

が、彼の老衰にひどくこたへた。彼は少年時から馴染みのオールド・マンズに住む従妹のところに暫く引越したが、書齋の仕事は全くできなくなつた。友人たちは協力して家を再建することとし、その間彼に長女のエレンをつけて、歐洲へ保養の旅にやることにした。十月の二十八日に彼らはニュー・ヨークを出帆した。

若い時と同じく、海の空氣は彼に健康をもたらし、ロンドンについた彼は、ボストンでは示すことのできなかつた活潑な應對や會話をすることができた。十一月の七日には、チエルシイの宅にカーライルを訪ねた。「彼は私を暫く眞剣に見つめた後、腕を置いて抱いてくれた、『も一度肉體のまゝ君を見ることができて嬉しい。』——私たちは坐つて、二時間もその上も、とめどなく話した、いろんな人間や事件や思想について。……彼は體も動作も昔どほり元氣だ——大分年とつては見えるが——そして記憶もたしかだ。」

ロンドンに十日滞在後、彼はパリに行きローエルに逢ひ、マルセイユ、ニイス、ローマを経て、十二月の末にカイロに着いた。一月の初め、旅行團に加つて舟でナイル河をさかのぼり、遠くフィレエまで行き、オシリスの屍が埋められたといふ傳説の墓を訪ねたが、エジプトは二三の異郷的な印象の外、彼の想像のエジプトをよるこぼさず、むしろ望郷の思ひをそつた。彼

の健康はよくなり、髪は所々濃く茶色に生えてきたが、精神的な作業には向かず、「絶対に書くことができなかった。」 歸途三月にはバリを通り、ルナン、テーヌ、エリイ・ド・ボーモン、そしてツルデーネフに紹介された。テイヌは翌日彼の『英文學史』を届けてきた。

英國に歸りつくと、公開の講演はすべてことわり、二度グラッドストーンと會食し、ブラウニングに逢つたが、カーライルとは手違ひ續きで、度々逢ふことはできなかった。オクスフォードでは、マクス・ミュラーの客となり、ジョウエト、ラスキンに紹介された。ラスキンの講義を聞いて、態度も實質も講義の模範的なものだと思つた。しかし、近代文明に對する彼の悲觀説には賛成できなかった。それはカーライルの説と同じで、それよりまだ悪い、カーライルはいつも最後には哄笑して晴天に戻してくれるが、ラスキンではどこまでも曇天だと思つた。オクスフォードからエディンバラへ行き、湖水地方を通つて、例のアレグザンダー・アイアランドを訪ね、例の如く暖いもてなしを受けた。

五月に彼は故郷に歸つた。停車場には町の人々が總出で、乳母車に乗つた赤ん坊まで集つてゐた。汽車が近づくと教會の鐘が鳴り、エマソンは樂隊に先導され、微笑する小學生の列の間を、馬車で運ばれていつた。花で飾つた緑門の彼方には、以前のまゝの白聖の家が幻のやうに

立つてゐた。感動した彼は、門の所へ引き返して、町の人達に感謝の挨拶をした。家は少しばかり改良が加へられてゐたが、書齋は變化なく、書物も原稿も畫や記念品も、昔のまゝの位置に置いてあつた。

ターミナス

エマソンは恢復した健康で、旅行前からもてあつかつてゐたエッセイ集の整理にかゝつた。しかし間もなくその不可能なことがわかつた。仕事は（後に彼の標準的な傳記を書く）ジニムズ・キャボットに委嘱され、知力の衰へからくるひどい重複や混亂などを修正して、一八七五年『文學と社會の目的』として出版された。エッセイの數は十一、そのうち最長のものは「詩と想像」で、エマソンの從來の文學論の多くの思想を再述してゐる。「社會の目的」の項は、作法や會話に關する注意を與へてゐる。その外、「雄辯」「引用と獨創」「靈感」「永生」といふ如き、エマソンの興味ある題目を收めてゐるが、特に新しい發表はないといつてよい。

それでも「私は信じる、偉大な永続的な事、靈感によらず、神秘的な前兆によらずして、爲し
透げられるものはない」といふ如き、賢き言葉は限りなくそこから拾へるのである。

なほ、エマソンは、長女エレンの忠實な助力をかり古い原稿の中から材料をとり出して、時々
少数の選ばれた聴衆のために講演し、また雑誌に論文を發表した。讀書は續けたが、言葉の發
見の困難から會話はますます苦痛となり、コンコードのソーシヤル・サークルの集まりにも次
第に出なくなつた。黙つて聽いてさへ居ればよい集まり、ライシーアムや町會堂の講演會には
出席した。教會も、この晩年には喜んで參列した。森の散歩はなほ續けたが、以前ほど遠く歩
くことはできなくなつた。それにウォールデンの森も、あたりが開けてきて、以前のやうな靜
けさを失つてゐた。一八七六年六月には、ヴァージニア大學の招きに應じ、埃りと暑さの中を
旅行し、南北戰爭の敗者の反感がまだ濃い聴衆を前に、騒がしい講演をした。

この頃、毎日澤山な手紙が舞ひこみ、來訪者も多く、エマソンは親切に彼らを遇した。書物
も、最初の十年か十五年の間は、出版者たちに「全く引き合はぬ代物」ときめられてゐたもの
が、よく賣れるやうになり、國中にひろがり、外國にも翻譯された。感謝の手紙が遠くから送
られた。經濟上の困難も、(殊に婦ファーズの努力によつて)この晩年にはすつと樂になつ

た。

一八七五年の四月十九日、コンコードの「橋畔の戦」の百年紀念日に「民兵」(The Minute
Man)の像の除幕式があり、エマソンは短い演説をした。それは彼が書いた最後の草稿だつた
が、長く文學的な仕事をやめた後であるにも拘らず、その文章には知力の衰へはひどく現はれ
てゐない。最後の講演となつたものは、一八八一年二月、マサチューセツ歴史協會でなされた
「カーライル」について同年七月、コンコード哲學學校でなされた「貴族」であつた。しかし、
言葉を助けたり原稿のページをくつたり、誰かゝ絶えずかひぞへをしてゐる必要があつた。

一八八二年の三月、ロングフェローが死んだ。その葬式に出たエマソンは、棺の側にいつて
つくづく死顔を眺め、數分後それを忘れたやうに又起ちあがつて眺めた後、そばにゐる一人の
友人に言つた、「あの紳士は善い美しい人間だつた。名前は忘れてしまつたが。」

——まもなく、彼自身の「ターミナス」(終局)がきた。同じ年の四月十六日の日曜日、教會
に朝と夕に出席し、午後は散歩したが、雨の中を外套を着てゐないことを忘れ、その時風邪の下
地を悪くしたらしく、翌日咳がひどくなり、その週のうちにすん／＼弱つてきた。彼自身は大
したことと思はず、それに病氣に馴れないので、いつもの如く着物を着、階下に降り、散歩に

さへ出かけた。書齋のソファに寝てゐる時、息子エドワードが見舞ふと、(もう書齋の中の見馴れたものさへ忘れがちだったのだが) カーライルの肖像に指さして、「あれはわしの友人だ、親友だよ!」("That is my man, my good man!")と叫んだ。その翌日(二十日)に肺炎の徴候が片肺の一部に現はれた。それはひどく悪くもなかつたが、抵抗力が全くなかつた。友人や家族の顔は忘れなかつたが、自分が誰か他人の家に病気で泊り込み不自由してゐるやうな錯覚を起した。夫人をそばに坐らせて、言葉の發見に困りながらも、二人でもつた長い幸福な生活についてしみじみ話した。私たちは今別れねばならない。しかし、も一度逢つて、今度は永久に別れなくなる。さういつて彼は微笑し、「あゝ、あの美しい子供!」("Oh, that beautiful boy!")と叫んだ。四十年前に死んだ長男ウォルドルを思ひ出したのである。最後の日には數人の友人と逢ひ、別れを告げた。苦痛は最後に來ただけだった。それもすぐエーテルでとめ、あとの静かな眠りの中に、徐々にその生命は消えていつた。一八八二年四月二十七日木曜日の夕方だった。

四月三十日の日曜日、遺骸は古い教會の聖壇に置かれ、友人や町の人たち、また遠くから會した人々の前で、告別の言葉が捧げられた。そしてスリービー・ホローの墓地の北寄りの丘上

の一本の高い松の木のもとに埋められた。そこには母と息子の墓があり、ソーローやホーソンの眠つてゐる場所にも遠くなかつた。大きな自然石が据ゑられ、石の表面には、彼の詩「問題」の一節が刻まれた。

The passive Master lent his hand

To the vast soul that o'er him planned.

従順なる名匠は手をかしたるのみ、

わが上に臨む巨大なる靈の企畫に。

年 表

- 一八〇三 五月二十五日、ボストンに生る。
- 一八一三—一七 ボストン・ラティン・スクールに學ぶ。
- 一八一七—二二 ハーヴァード・カレッジに學ぶ。
- 一八二二—二五 兄の私塾に教ふ。
- 一八二五 二月、ハーヴァード神學校に入學す。
- 一八二六 冬、保養のため南部に旅行す。
- 一八二九 ボストン第二教會の牧師となる。九月、エレン・ルイズ・タッカーと結婚。
- 一八三一 二月、妻死す。
- 一八三二 九月、教會を辭す。十二月、ヨーロッパ旅行に出發。
- 一八三三 十月、歸國。

- 一八三四 十月、弟エドワード、ボルト・リコにて死す。同月、コンコードのオールド・マンズに移居す。
- 一八三五 九月、リディア・ジャクソンと結婚。
- 一八三六 五月、弟チャールズ死す。九月、「自然論」(Nature)出版。十月、長男ウォルドルフに生る。
- 一八三七 八月三十一日、ファイ・ビータ・カッパ (Phi Beta Kappa)の會合に、「アメリカの學徒」(The American Scholar)につき講演。
- 一八三八 七月十五日、ハーヴァード神學校に講演。
- 一八四一 『エッセイ集、第一』(Essays, First Series)。
- 一八四二 一月、息子ウォルドルフ死す。
- 一八四二—四四 雑誌『ダイアル』(The Dial)の主筆。
- 一八四四 『エッセイ集、第二』(Essays, Second Series)。
- 一八四七 『詩集』(Poems)。十月、第二回ヨーロッパ旅行に出發。
- 一八四八 七月、歸國。

- 一八五〇 『代表的人物論』 (*Representative Men*)°
- 一八五三 十一月、母死す。
- 一八五六 『イギリスの特性』 (*English Traits*)°
- 一八六〇 『處世論』 (*Conduct of Life*)°
- 一八六七 詩集『五月祭』 (*May Day*)°
- 一八七〇 『社會と孤獨』 (*Society and Solitude*)°
- 一八七二 七月、家焼失。十月、第三回ヨーロッパ旅行に出發。
- 一八七三 五月、歸國。
- 一八七五 『文學と社會の目的』 (*Letters and Social Aims*)°
- 一八八二 四月二十七日、コンコードにて永眠。

書 目

エマソン全集の標準版

- The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. Centenary Edition. Edited by Edward Waldo Emerson, with index. 12 vols. 1903—1921.
- The Journals of Ralph Waldo Emerson*, edited by E. W. Emerson and Waldo Emerson Forbes. 10 vols. 1909—1914.

選集としては、

- Emerson: Representative Selections*, edited, with introduction, by Frederic I. Carpenter. 1934.
 - The Heart of Emerson's Journals*, edited by Bliss Perry. 1926.
- 傳記及び批評としては、

Cabot, James Eliot. *A Memoir of Ralph Waldo Emerson*. 2 vols, 1887. (藍装帯起)
Holmes, Oliver Wendell. *Ralph Waldo Emerson*. (American Men of Letters Series).
1884. 232

Garnett, Richard. *Life of Emerson*. (Great Writers Series). 1888.

Woodberry, George E. *Ralph Waldo Emerson*. (English Men of Letters Series).
1907.

Firkins, O. W. *Ralph Waldo Emerson*. 1915.

Brooks, Van Wyck. *The Life of Emerson*. 1932.

Michaud, Regis. *Emerson: the Enraptured Yankee*. Translated by George Boas.
1930.

Emerson, Edward Waldo. *Emerson in Concord*. 1916.

Hawthorne, E. G. (ed.). *The Memoirs of Julian Hawthorne*. 1938.

Arnold, Matthew. *Discourses in America*. 1885.

ヘンソンと東洋の関係について

Carpenter, Frederic Ives. *Emerson and Asia*. 1930.

Christy, Arthur. *The Orient in American Transcendentalism*. 1932.

日本の出版では

『エマソン全集』 平田禿木・戸川秋骨譯、一九一七。(國民文庫)。

『代表偉人論・自然論・論文鈔』 柳田泉譯、一九三一。(世界大思想全集)。

『自然論』 片上伸譯、一九三三。(岩波文庫)。

『エマソン論文集』 戸川秋骨譯、一九三八。(岩波文庫)。

『エマソンの言葉』 志賀勝譯、一九四八。

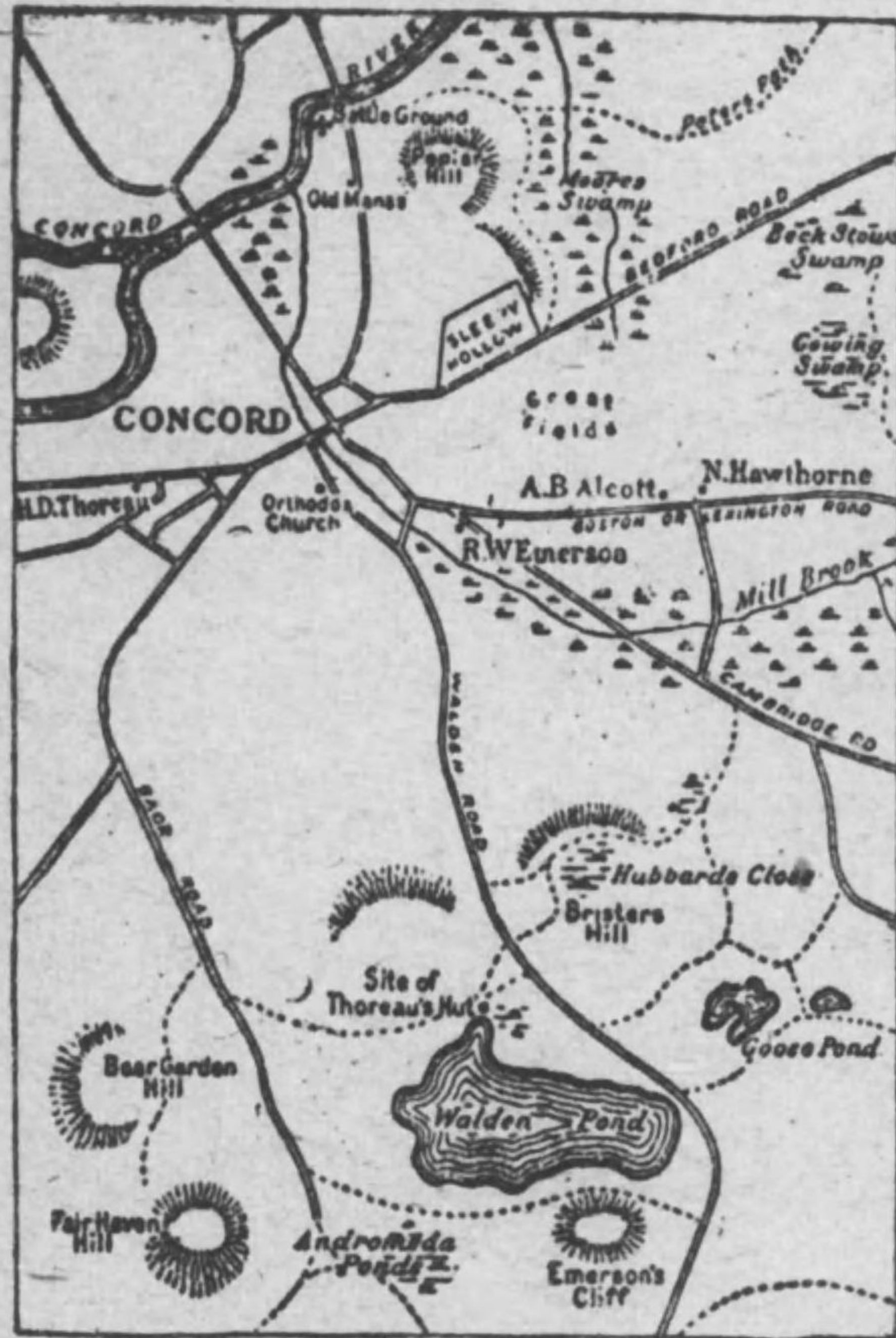
『哲人エマソン』 松尾孝輔・土屋巴譯、一九二二。〔Edward Emerson; Emerson in

Concord の註〕。

『聖哲エマソン』 服部他之助著、一九二九。

『エマソン』 舟橋雄著、一九三三。(英米文學評傳叢書)。

A Bibliography of R. W. Emerson in Japan. 壽岳文章編、一九四七。



コンコード附近の地図

19122

索引

Adams, Abel.....	113, 125, 161
Adirondack Club	166
Agassiz, Alexander ...	164, 166
Alcott, Amos Bronson.....	69,
70, 71, 79, 81, 84-88, 91, 93,	
97, 99, 142, 151, 165, 167, 201	
Alcott, Louisa May.....	
.....	81, 86, 87, 142, 168
Allingham, William	152
<i>American Scholar, The</i> 61, 184	
<i>Analogy of Religion, Natural</i>	
<i>and Revealed</i>	26
<i>Anthology</i>	7
<i>Aristocracy</i>	225
Arnold, Matthew	211, 215
<i>Atlantic Monthly</i>	163
Bacchus	189
Beaumont, Elie de	222
Bliss, Daniel	5
<i>Bliethedale Romance</i>	78
<i>Books</i>	179, 181
Boston	6, 10, 23,
26, 28, 31, 36, 57, 69, 74, 84,	
86, 97, 113, 115, 138, 139, 141,	
154, 161, 163, 164, 166, 170	
<i>Boston Hymn</i>	153
<i>Bramah</i>	164, 190
<i>Bronte Sisters, The</i> ... 99, 203	
Brook Farm	76, 94, 110
Browning	184, 222
Brown, John.....	90, 150, 168
Bulkeley, Elizabeth	34
Bulkeley, Peter	3
Byron	8, 16
Cabot, James Elliot	223
Campbell, Thomas	183
Cairo	221
Cambridge.....	7, 27, 29, 60, 94
Carlyle, Jane	43, 116
Carlyle, Jeen	119
Carlyle, Thomas.....	
.....	40, 42-46, 54, 70,

71, 73, 74, 78, 85, 88, 96, 103,
115-119, 127, 128, 133, 162,
171, 193, 199, 211, 222, 226
Carlyle.....225
Channing, Dr. William Ellery
.....27, 28, 29, 42
Channing, Edward16
Channing, William Ellery (the
poet).....92, 93, 151, 165, 211
Channing, William Henry.....
.....69, 71
Character110
Charleston30
Chelsea116, 221
Chicago126
Children of Adam141
Circles110
Civilization180
Civilization at a Pinch.....153
Clough, Arthur Hugh119
Club179
Coleridge.....8, 23, 42, 46, 74, 116
Compensation
.....30, 107-110, 190
Concord
.....3, 4, 14, 30, 31, 49, 69,
80, 85, 88, 92, 97, 103, 105,
114, 142, 147, 148, 149, 150,
156, 162, 166, 203, 224, 225
Concord Hymn58, 189
Conduct of Life.....
.....127, 133-137, 179
Conservative, The72
Considerations by the Way.....135
Courage181
Cousin, Victor74
Craigputtock..... 43, 116

Dana, Richard Henry164
Dartmouth College.....64
Days.....181, 191
De Quincey, Thomas 116
Destiny..... 133, 134
Dial70-73, 76, 94, 110, 114
Dickens, Charles..... 99, 203
Dirge, The189
Domestic Life12, 179, 180
Dwight, Timothy164

Each and All.....190
Edinburgh.....42, 118, 222
Edinburgh Review43

Edwards, Jonathan8
Eloquence180, 223
Elton, Charles103
Emerson, Charles Chauncy
(younger brother).....
.....7, 13, 31, 40, 50, 55, 208
Emerson, Edith.....161, 219
Emerson, Edward Bliss
(younger brother).....
.....7, 12, 13, 55, 208
Emerson, Edward Ellen.....
.....221, 224
Emerson, Edward, of New-
bury.....4
Emerson, Edward Waldo (se-
cond son).....124, 161,
163, 171, 174, 197, 207, 226
Emerson, Ellen Luisa (Tu-
cker), (first wife)
.....31, 36, 39, 44
Emerson in Concord124
Emerson, Joseph, of Malden
.....4, 5
Emerson, Joseph, of Mendon
.....3, 4
Emerson, Lydia (Jackson),
(wife)49-54,
81, 88, 125, 142, 161, 193
Emerson, Mary Moody (aunt)
.....5, 8,
9, 11, 12, 27, 29, 38, 167, 207
Emerson, Robert Bulkeley
(younger brother).....7, 13
Emerson, Ruth Haskins (mo-
ther).....8, 11, 123
Emerson, Thomas.....3
Emerson, Waldo (elderst son)
.....54, 82, 111, 226
Emerson, William (elder bro-
ther).....7, 11,
17, 18, 26, 35, 36, 81, 82, 151
Emerson, William (father).....
.....6, 7, 8, 12, 13, 14
Emerson, William (grandfa-
ther).....5, 6, 50
English Traits.....
.....123, 127, 130, 131-133
Essays, 1st Series106-110
Essays, 2nd Series110
Everett, Edward16
Experience110

Farming..... 179, 181
 Florence40
 Florida31
 Forbes, John Murray.....
162, 219
 Forbes, Col. William H.....
161, 219, 224
Fortune of the Republic
 154
 Fourier, Charles.....76, 80, 94
 Franklin.....58, 133, 135, 165
Friendship110
 Fruitlands79, 85
 Fuller, Margaret.....69, 70,
 71, 78, 92, 94-97, 111, 119, 202

 Garrison, William Lloyd ...86
Give AH to Love189
 Gladstone, William Ewart...222
 Godwin, William.....28
 Goethe.....16, 45, 54, 72,
 94, 104, 127, 129-131, 211
 Goldoni, Carlo.....37
 Greeley, Horace94
 Greenough, Horatio40

Hafiz185
 Harvard College...4, 6, 16, 18,
 19, 23, 27, 28, 41, 52, 60, 64,
 65, 69, 73, 88, 139, 155, 161,
 162, 169, 170, 176, 204, 205, 206
 Harvard Divinity School.....
27, 29, 63
 Harvard Village...6, 7, 8, 79, 98
 Hawthorne, Julian
156, 168, 198
 Hawthorne, Nathaniel
 ... 50, 78, 97-100, 164, 166, 227
 Herder, Johann Gottfried von
 8
History.....106, 110
 Hoar, Samuel147
 Hoar, Judge E. R.....164
 Holmes, Oliver Wendell
 60, 63, 142,
 163, 164, 165, 166, 198, 208
 Hooper, Ellen71
Humble Bee183
 Hunt, Leigh..... 116

Illusions...123, 133, 134, 137, 181
Immortality.....223

Inspiration.....135, 156
 Iowa.....150
 Ireland, Alexander...44, 118, 222

 James, Henry (Senior).....
114, 168, 172, 210
 Jowett, Benjamin.....222

 Kansas150
 Kentucky123, 137

 Landor, Welter Savage
40, 46, 133
 Lane, Charles85
Leaves of Grass..... 140-143
Life and Literature.....153
 Lincoln.....153, 154, 155
Literary Ethics.....64
Little Women87
 Liverpool
45, 46, 97, 115, 117, 119
Love110
 London
 ...42, 85, 115, 118, 119, 170, 221
 Longfellow
 ...94, 142, 164, 165, 166, 225

Lowell, James Russell
 ...60, 62, 71, 86, 142, 155, 163,
 164, 165, 166, 198, 209, 221
 Lyceum...57, 113, 147, 208, 228

 Madame de Staël8, 74
Man the Reformer80
Manners110
 Martineau, Harriet ...117, 118
May Day
174, 181, 183, 186, 187
 Mazzini, Giuseppe94
Memoirs, The.....156, 198
 Milton, John837
 Montaigne, Michel.....25
Montaigne127
My Garden.....164

 Naples38
Napoleon.....127-130
Natural History of the In-
tellect41, 170
Nature.....50, 55,
 56, 75, 125, 136, 140, 184, 212
New England Reformers...110
 Newman, John Henry, Cardi-

nal.....211
 New York.....41, 46,
 94, 113, 114, 140, 170, 174, 221
 Niagara Falls.....123, 219
 Nile221
 Norton, Andrews.....60

Ode of Immortality.....45
Ode to Beauty.....189
 Ohio.....151
Old Age182
 Old Manse
5, 50, 51, 97, 98, 221
*On the Uses of Natural His-
 tory*41
Orphic Sayings71
 Owen, Robert80
Over-Soul, The
107, 108, 110, 181
 Oxford.....119, 212, 215, 222

 Paris.....41, 119, 221, 222
 Parker, Theodore
69, 71, 138-140, 166
Parnassus143, 193
 Patmore, Coventry116

Peabody, Elizabeth.....69, 98
Persian Poetry164
 Phi Beta Kappa Society.....
60, 65, 162, 183, 220
 Phillips, Wendell147
Plato8, 24, 87, 91, 127, 128
 Plymouth..... 4, 9, 51, 53
Poems110, 183
Poetry and Imagination ...223
Poet, The.....110
 Pope, Alexander183
Power134
Powers and Laws of Thought
 118
 Palfrey, John Gorham.....
60, 149
Problem, The71, 90, 227
Prudence.....110

Quotation and Originality...223
 Quincy, Josiah.....88

 Renan, Ernest.....222
Representative Men
 127-131
Rhodora, The.....187, 188

Ripley, Ezra, Dr.....
6, 14, 15, 31, 50
 Ripley, George.....
67, 71, 76, 77, 78
 Ripley, Samuel23, 30
 Ripley, Sarah Alden69
 Rome.....38, 40, 95, 221
 Ruskin, John222

 Saadi72, 190
 Sanborn, Frank152, 168
 San Francisco.....219
Sartor Resartus.....103
 Saturday Club
142, 164, 165, 202, 209
Sea-Shore187
Self-Reliance
107, 109, 110, 111
 Shakespeare, William.....
127-129, 194, 202
 Sleepy Hollow167, 226
Snow-Storm187
Social Aims223
Society and Solitude
127, 179-182
Sphinx72, 190

Stonehenge.....119, 133
 St. Paul Cathedral42
 St. Peter38
Sunday72
Swedenborg114, 127, 129
 Swinburne, Algernon Charles
 116
 Syracuse37


 Taine, Henri222
 Tennyson, Alfred...116, 117, 181
Terminus
164, 174, 182, 189, 199
 Thoreau, Henry David9,
 69, 71, 72, 82, 86, 88-93, 115,
 142, 162, 164, 166, 211, 227
Thoreau164
Threnody.....111, 112, 189
 Ticknor, George16
 Transcendental Club
 69, 164
 Turgenev, Ivan Sergeitch 222
Two Rivers.....191

Uriel.....189
Uses of Great Men.....128

Venice	41
Very, Jones	71, 72
<i>Vindication of the Rights of Woman</i>	94
Virginia.....	84, 150
Walden...51, 89, 90, 104, 105, 114, 168, 169, 185, 205, 206, 207, 228	
Whitman, Walt	140-143
<i>Wealth</i>	135
Webster, Daniel.....	139, 148
<i>Wilhelm Meister</i>	45
<i>Wood-Notes</i>	72, 187, 192
<i>Work and Days</i>	181
Wordsworth, William	
.....28, 45, 46, 117, 194	
<i>Worship</i>	135
Wright, Henry.....	85
Young, Brigham.....	219

エマソン

昭和23年12月20日印刷
昭和23年12月25日發行



著者 志 賀 勝
發行者 東 井 三 代 次
奈良縣丹波市町川原城
會員番號A 125015
印刷者 岡 島 善 次
製本 奈良縣丹波市町川原城
天 理 時 報 社
發行所 株式會社 養 德 社
本社 奈良縣丹波市町川原城
振替口座 京都25648香
京都市中京區朝樂師道室町西人

[160圓]

配給元 日本出版配給株式會社

近 刊

ウイリアム・ジエームス 今田 惠著

觀念的なドイツ哲學に満たされない、感じ易く鋭利な個性が、思想的苦悶の末途に独自の哲學體系たるプラグマティズムを確立し、今に至る迄アメリカ思潮の根本的方向を決定した、ウイリアム・ジエームスの評傳である。吾が邦ジエームス研究の權威今田惠氏多年鑽骨の研究は、哲學、生理學、心理學、宗敎學の各分野に互つた彼の全貌を描いて餘す所なく、又個と全體、ロスとパトス、經驗と觀念の相剋に悩む偉大な思想家の苦悶を生々と讀者に傳へてくれる。

ウイリアム・モリス 増野正衛著

詩人、劇作家、社會思想家、或は美術工藝の改良家として、モリスの多面多様な業績は、單なる淺薄な間口の廣さではない。充實した生の本質的な發展として、かゝる豐饒な多様性を示す所に、モリスのゲイテ的人間性、全人的性格があるのである。十九世紀人として稀有なかゝるゲイテ的人間性にこそ、モリスの偉大さがあるのであり、嘗て芥川龍之介を魅倒した所以なのである。人間、文化一般の跛行性を痛感する現下の知識層に取てかゝる完全な人間像を贈る。

終

